

目黒区納税貯蓄組合連合会優秀賞

「税金」の目を向けるべきところ

目黒区立東山中学校 三年

一見 早藍

「税金」と聞くと、多くの人は「お金を取られるもの」や「人だけが関係するもの」といった印象を持つかもしれません。かくいう私も、以前は税について深く考えることがなく、何となく遠い世界の話のように感じていました。ですが、社会の仕組みや公共の在り方について学ぶにつれ、税金が私達の生活を支える不可欠な制度であることに気づかされました。

税金は、国や地方自治体が私達の生活を守り、より良い社会を築く為のものです。教育、医療、福祉、交通や道路の整備、災害対策など、これら全てに税金が使われています。例えば、私達が日々通う学校の教室、使用している設備、さらには教師の人件費に至るまで、その多くが税によって支えられています。つまり、私達が無償で教育を受けられるのは、誰かが納めた税金があつてこそなのです。

また、医療の分野でも税は大きな役割を果たしています。私の祖母が入院した際、医療費の負担が少額で済んだことがあります。これは、国が公的医療保険制度を通じて税金を投入しているおかげです。もし、税による支えがなければ、誰もが平等に医療

を受けることは難しくなると考えられます。しかしながら、税金は単なる「支出のための手段」ではありません。税の使い道を誰が決め、どのように分配されているかという点にこそ、私たち一人ひとりが注目すべきであると考えます。近頃、ニュースでは時折、「無駄な公共事業」や「不透明な支出」といった問題が取り上げられています。そうした事例を見るたびに、納税者としての責任と権利、つまり「税金の使われ方を監視する」という視点の重要性を痛感します。

私はまだ未成年で、税金を納める立場にはありません。ですが、それでも税に関する知識を深めることには大きな意味があると思います。将来、社会の一員として働き、税を納めるようになったとき、ただ機械的に支払うのではなく、「このお金が社会のどこに、どう活かされるのか」を意識できる人間でありたいと感じます。そのためにも、若いうちから税について学び、関心を持つことが重要だと考えます。

税金とは、個人の利益を超え、社会全体の幸福を実現するための「共有の財源」であるといえます。そして、それは、納税者一人ひとりの信頼によって成り立っています。だからこそ、税に対する無関心は、社会に対する無関心と同等といっても過言ではありません。

私たちは、より良い社会の実現のために、税を「支払う義務」だけでなく、「考える責任」として捉えていくべきであると考えます。そしてその姿勢こそが、未来の民主主義を支える土台になるのだと、私は思います。